令和６年度
東京都現代美術館美術資料収蔵委員会
評価部会

令和７年１月２９日（水）

東京都現代美術館

午後２時00分開会

知花課長：お時間になりましたので、始めさせていただければと思います。

本日は、お忙しい中、御出席を賜りまして、誠にありがとうございます。

ただいまから令和６年度東京都現代美術館美術資料収蔵委員会評価部会を開催いたします。

私は、東京都生活文化スポーツ局文化振興部文化施設担当課長の知花と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日の司会を務めさせていただきます。

続きまして、本日御出席いただいております委員の皆様の御紹介を私のほうからさせていただきます。私から向かって左の席から順に御紹介をさせていただければと思いますけれども、まず、神山委員でございます。

続きまして、児島委員でございます。
千葉委員でございます。

続きまして、長門委員でございます。

続きまして、平野委員でございます。

続きまして、青山委員でございます。
続きまして、三輪委員でございます。

続きまして、事務局職員の紹介をさせていただきます。

東京都現代美術館副館長の小川でございます。

小川副館長：小川でございます。よろしくお願いいたします。

知花課長：同じく、事業企画課長の關次でございます。

關次事業企画課長：關次でございます。本日はよろしくお願いいたします。

知花課長：同じく、事業係長の岡村でございます。

岡村事業係長：よろしくお願いいたします。

知花課長：どうぞよろしくお願いいたします。

次に、お手元の資料の確認をさせていただきます。

一番上に会議次第がございまして、続いて、資料１「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会評価部会委員名簿」、資料２「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱」、資料３「東京都現代美術館美術資料収集方針」、資料４「令和６年度東京都現代美術館収集候補作品一覧表」、資料５「作家・作品説明書」、最後に評価部会の評価表でございます。

御不足等ございませんでしょうか。　ありがとうございます。

資料につきましては、現時点で未公開情報等が含まれておりますので、会議終了後、回

収をさせていただきます。

議事に入る前に、当部会の公開について御説明をさせていただきます。

本日の議事は、評価対象資料の価格評価に関するものでございます。資料２の要綱、第10の規定に基づきまして、非公開とさせていただきます。

なお、当部会の議事録につきましては、同要綱第10第２項の規定に基づき、資料収集決定の後、委員の皆様の個別の価格評価を除きまして、公開を予定しております。公開に当たって、委員の皆様には追って内容の確認をさせていただければと考えております。

また、委員の皆様のお名前と現職名につきましては、東京都のホームページで既に公開をさせていただいております。

それでは、早速議事に入ってまいります。

事務局から、収集作品の説明をさせていただきます。

小川副館長：収集作品につきまして御説明を申し上げます。

本日、評価をお願いする作品は、購入が17件、寄贈が19件、合計36件でございます。

これらの作品につきまして、コレクション部会では収蔵することが適切であるという御意見を賜っております。作品の詳細につきましては、事業企画課長の關次、事業係長の岡村及び担当学芸員の方から御説明を申し上げます。よろしくお願いします。

關次事業企画課長：では、御説明させていただきます。

東京都現代美術館は収集の基本方針、そして令和６年度の購入方針にのっとり、首都東京の現代美術館にふさわしい作品資料を収集し、コレクション展示や企画展の充実を図ってまいりたいと存じます。

また、今年度の作品資料の収集に当たり、特に重点を置いてきたことが３つございます。収集を担当する各学芸員の日頃の調査、研究に基づき、将来の活躍が期待される日本の若手作家の発掘及び支援、そして中堅作家のフォローアップに努めてまいりました。そして既に当館が収蔵してきた東京都現代美術館のコレクションをさらに歴史的、体系的に俯瞰した際に、それら作品の系譜がたどれるよう、作品、作家研究を補完するような重要な作品資料を充実させることに主眼を置いております。

また、コレクションのジェンダーバランス、また地域差などの是正に向けた収蔵も行ってまいりました。具体的には当館の個展の開催を契機として、女性作家の所蔵品を進める、また、購入を契機に御寄贈いただくなど、バランスをよく作品を収蔵してまいりました。

そして最後に、長年寄託だった作品から、今年度いよいよ収蔵へと切り替えた作品もございます。これらが今年度の収蔵の概要でございますが、各作品の概要詳細につきましては、事業係長の岡村より御説明申し上げます。

では、岡村さん、お願いします。

岡村事業係長：それでは、候補作品の概要を私の方から御説明させていただきます。

お手元の資料４「収集候補作品一覧表」と、資料５「作家・作品説明書」を併せて御参照ください。

資料の並びですが、購入作品の後に寄贈作品がリストされております。購入に併せて同じ作家の寄贈作品がある場合は、順番が少し前後いたしますけれども、一緒にコメントさせていただきますので、この２つの表を行き来する形になりますが、御協力お願いします。

まず最初に、購入の１番、中村宏の作品です。1932年生まれの中村宏は今年で93歳になられる御高齢ですが、現在も現役で制作発表活動を続けておられます。当館では都美術館時代からの収蔵に加え、2007年の個展開催を契機に、多くの資料を含む幅広いコレクションを形成してまいりました。

今回、購入候補とする「防空壕　1945」は、昨年2024年に発表された作家の最近作でございます。

あわせまして、寄贈の18、19、20の３点、こちらが御寄贈になりますけれども、こちら「防空壕」と併せまして、自身の戦時中の記憶に向き合い描いたという点で、重要な意味を持つシリーズをなすものであります。

中村のこれまでの作品との共通項も見いだされますし、その長年にわたる画業の連なりを読み解く上でも重要な作例と言えると思います。

また、戦時期に制作され作品を多数含む福富太郎コレクションの作品などとの対比が可能でありますし、折しも戦後80年を迎えようとするこの時期に、絵画を通じて戦争の記憶を継承するという観点からも、これらの収蔵には大きな意味があると考えております。

続きまして、購入作品ですが、２番、それから寄贈の21番、こちらが当館にとって開館後、一番最初に個展を開催した日本人作家である中西夏之の作品です。その個展に際して制作発表した３点組の作品のうち、１点「柔らかに、還元　Ⅰ」というものがさきに収蔵がかなっておりましたが、残りの２点については、作家の御存命中から当館に御寄託をいただいておりました。できればこれら３点は一まとまりとしてコレクションに加え、今後も当館で管理、活用できればと交渉を重ねてきました結果、このたび御遺族からの御理解を頂戴し、１点購入、１点寄贈という形での収蔵を御提案するものです。

続きまして、３番、こちらも購入です。恩地孝四郎によるレリーフ作品です。1891年生まれで、木版画の近代化運動を推し進めた創作版画の重要作家であり、また、日本における抽象表現の先駆者の一人として、日本の前衛芸術史を考える上でも重要な作家と言えます。恩地の本作のようなレリーフ状の作品については、戦前のものを含めたごく数点しか残されておらず、貴重な作例と言えると思います。

当館では恩地の絵画や紙作品を複数収蔵しており、それらとともに恩地の創作活動の理解を深めるとともに、終戦直後の前衛運動の再生を考えるなど、様々な角度からコレクション展での活用を期待しております。

続いて、４番から９番、山下菊二の「叛軍コラージュ」連作からの６点です。

1919年生まれの山下菊二は、戦後日本美術を考える上で重要な作家の一人ですが、当館では都美術館時代に収蔵した絵画作品１点があるのみでした。これらのコラージュ作品を加えることによって、時代の様相に向き合いながら、自らの戦後を問い続けてきた画家の

批評性や複眼的な志向といった特徴を示すことが可能になると思います。

また、コラージュ的な手法を取る様々な作家との対照といった切り口においても、コレクション展で様々に御紹介できると考えております。

続いて、10番から11番の２点、そして34、35の２点、購入、寄贈併せまして、今回が当館では新規収蔵となります白井美穂の新旧の作品でございます。

1962年生まれの白井美穂については、1995年、当館開館時の開館記念展の出品候補作家としてもその名が上がっておりましたが、当時拠点がニューヨークだったこともあり、その後、展示や収蔵の機会を逸してきた作家の一人です。

昨年、府中美術館でまとまった個展も開催され、インスタレーション、写真、絵画、映像、パフォーマンスなど、特定の技法やジャンルにとどまらないその活動が、改めて総体として俯瞰されました。また、作家の関与による整備や修復も行われました。さらに、個人の方から34、35の初期の重要な立体作品２点についても寄贈のお話をいただきましたので、この機会を逃さずに複数点の作品を収蔵できればと考えました。

スケールの大きさや領域横断性においても、当館コレクションにおける女性作家の多様性を推し広げるとともに、豊嶋康子らとともに、もの派の榎倉康二の薫陶を受け、直接に受けた作家の系譜といった切り口などでもコレクション展で相互参照が可能になります。

続いて、12番、購入ですが、福田尚代の作品です。福田は本や文具といった自身にとって愛着のあるものを素材とした作品を手がけてきました。当館では2014年の「ＭＯＴアニュアル」への参加を機に、書物を素材とした作品を複数点収蔵しており、折々にコレクション展でも紹介してまいりました。

それらに加えて、今回お諮りしますのは、昨年行われた個展で発表された近作で、文字に関わる文具である消しゴムを素材に一つ一つ舟、あるいはつぼのような形に造形した小さな彫刻103個から成る作品です。

福田は活動の初期から消しゴムを用いた作品を手がけていましたが、当館にはいまだこのタイプの所蔵がなかったため、収蔵済みの作品と併せて、作家の関心の幅を示すことができると考えております。

続いて、13番、購入ですけれども、今回が新規収蔵となる横山裕一の作品です。漫画の型を抜き出し、利用しながら、内容よりもその形式や構造を前面化し、漫画表現の可能性を広げるとともに、現代美術としての批評性も兼ね備えた横山の作品は、2000年代以降の日本の現代美術を語る上で重要な表現と考え、収集を検討してまいりました。

お諮りする「野獣とわたしたち」は、横山が2005年から２年ほどかけて描いたおびただしい数のパネル状のカンバツ作品のうち、合計187点の組合せから成る連作です。全点を一面に並べれば、かなりのスケールとなりますが、あるいは異なる組合せ点数で様々にインスタレーションすることも可能で、空間に合わせて形を変えて、繰り返し展示することを想定しております。

続いて、14番、購入です。加藤美佳が10年もの年月をかけて新たな境地を示した大作イ

ンスタレーションです。

加藤は大学院在学中に行った個展で鮮烈なデビューを飾りましたが、自作の人形の顔を写真撮影し、イメージを大きく引き伸ばして、リアルに描いた絵画作品で知られております。当館ではその初個展に出品された数少ない作品のうちの「カナリヤ」と、少し後の子犬を描いた「Seed」という絵画２点を収蔵しております。一応美術館として加藤の作品を２点持っている館はうちだけと認識しております。

もともと多作ではなかった加藤ですけれども、さらに出産や子育てなどを機に、長く発表活動から遠ざかっていました。本作はそんな加藤が昨年、18年ぶりに行った個展で発表したものです。これを美術界と離れた環境に一旦あっても、創作の手を止めはしなかった作家のこの間の集大成として評価するとともに、同じ時間と注力をかけて制作することは、恐らくできないであろう唯一無二の作品として、初期作品に加えて収蔵したいと考えております。

15番から16番の２点、こちらも購入です。同じように新規収蔵となる松井えり菜の絵画作品です。

松井えり菜は1984年生まれで、まだ40代に入ったばかりですけれども、松井も早くに頭角を現し、キャリアの初期から評価を得て、発表歴は20年以上になると思います。当館では複数の企画展に出品があったものの、収蔵の機会を逸してまいりました。松井もまた2018年に出産というライフステージの変化を経験しており、これらの作品には初期作品から連なるモチーフや描写法を残しながらも、子育てと制作の両立を図る中での葛藤や模索も見て取ることができます。

制約があるゆえに、自己の創作欲求と向き合う濃密な時間をかけて描かれたこの２点を、作家のさらなる飛躍を予見させるミッドキャリアの重要な試金石と評価し、コレクションに加えたいと考えます。

続いて、購入17番、ヴィクトル・パリモフが1920年に東京、大阪、京都で開催した「日本に於ける最初のロシア画展」に出品した絵画作品です。

サイズや当時の販売価格、また目録に図版が掲載されている数少ない作品の一つであることから、出品作におけるパリモフの代表作と考えられると思われます。長く個人のお手元にあったもので、収蔵後には補修等を要すると思われますが、主たるイメージ部分は欠落なく残っております。未来派のグローバルな視点での検証が進む中、既に収蔵している２点のパリモフ作品をはじめ、周辺の作品や資料と併せて、今後の研究や展示に資するところの大きい収蔵になると思っております。

この後が寄贈のみの作品です。

22番は実験工房に参加していたことでも知られる作曲家で造形作家の佐藤慶次郎の作品です。

神戸市立青少年科学館に35年にわたり常設されていた作品を、展示室のリニューアルを機に撤去されることになったため、御寄贈のお話をいただきました。非常にシンプルな原

理で作られており、長く展示されていたにもかかわらず、状態もよく、作家は他界していますが、その継承者がサポート体制を組んでいることから、今後のメンテナンスについても御助力がいただける体制があります。

幅広い観客が楽しめる作品ですし、当館所蔵の実験工房の作品に加えて、テクノロジーとアートの関係を考えるといった視点での展示活用も見込まれることから、ぜひ収蔵したいと考えております。

続いて、23番から30番の寄贈作品、計８点は、イケムラレイコのドローイングです。

イケムラレイコについては、一昨年、まとまった収蔵がかないまして、現在コレクション展で早速お披露目の展示をさせていただいておりますが、この特集展示に作家の御協力を仰ぐ機会に併せて、作家自身が選んでくださり、今後も一緒に展示ができるようにと御寄贈のオファーを頂戴しました。８点のうち７点は現在展示中ですので、後ほど展示室にて御実見いただけます。

31番から32番の２点は、いずれも野村和弘の作品です。

2019年の企画展を機に複数作品の収蔵が既にありますが、そのお披露目として、今年度コレクション展で特集展示を実施いたしました。その際に作家から借用して一緒に展示した作品のうちの２点を御評価いただきます。

特集展示に際しては、展示室の回遊性を高めるようなインスタレーションが大変効果的で、また複数作品を併せて見ることで、パフォーマンス性をはらんだコンセプチュアルな作風の理解が深まりまして、大変好評いただきました。既に収蔵した作品と併せて今後も活用できればと思います。

また、奈良美智さんなどをはじめとして、同世代で1990年代にヨーロッパ、特にドイツ、デュッセルドルフに留学してキャリア形成をなした作家たちとの一人という点でも、既に収蔵した複数の作家たちとの対比が可能と思っております。

36番は、ジャデ・ファドジュティミです。このファドジュティミはナイジェリア系移民の両親のもと、ロンドンに生まれ、ロンドンで絵画を学びました。大胆な筆致と色遣いで早くから注目され、史上最年少でテートモダンに作品が収蔵され、話題を生んだことでも知られています。

ファドジュティミは、自身のルーツであるアフリカ系文化とともに日本の文化、とりわけアニメやビデオゲーム、ファッションなどからの影響を受けてきたと公言しています。2016年には交換留学で京都に滞在、その後も定期的に来日し、日本の文化や作家たちとの交流を続けてきました。

非欧米圏にルーツを持つ作家たちへの注目度が高まる近年のグローバルな動向について、近年の収集も含めて参照点となる収蔵が、当館ではまだなかなか体系的にはできていない中、一つの手がかりとして、また本作は彼女が東京で描き、京都で発表した作品であることから、国内の美術シーンと海外動向との交差例として、寄贈という形ではありますが、コレクションに加え活用していきたいと考えております。

以上、駆け足でございましたが、概略となります。

１つ資料の補足なんですけれども、今回一覧表のほうでイケムラレイコさんの作品を、８件あるんですけれども、それを１つの項目にさせていただいておりますので、計算のために別表がついてございます。評価額計算用という表がついているかと思います。こちらのほうで１点ずつの御評価をいただきまして、その合計額を最終的な評価表のほうに書いていただく形になりますので、ちょっとお手数なんですけれども、御留意いただければと思います。

以上となります。

知花課長：ありがとうございます。

ここまでのところで何か御質問等ございますでしょうか。

また実見のタイミングでいろいろ御質問いただけるような場面もあるかなと思いますが、実見に移らせていただいてもよろしいでしょうか。

そうしましたら、資料４と５と、あと鉛筆ですかね、資料４と５と鉛筆をお持ちいただいて、実見に移りたいと思います。

（委員離席）

（作品実見）

（委員着席）

知花課長：委員の皆様、どうもお疲れさまでございました。

適宜御質問等いただいたところかなと思いますけれども、この場で皆様から御質問等ございましたら、お願いできますと幸いでございます。いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。

ありがとうございます。

では、続きまして、評価方法について御説明をさせていただきます。

評価表をお手元に御用意させていただいておりますけれども、こちらにボールペンで金額を記載いただきまして、最後に署名をいただければと思います。

評価方法ですが、評価額の最高額と最低額を除いた残りの価格を平均点として計算をさせていただき、委員会としての評価額とさせていただきたいと思います。金額は税込みのもので御記載いただければと思います。

評価方法について何か御質問はございますでしょうか。

ありがとうございます。

それでは、お手元のボールペンにて御記入をお願いできればと思います。御記入が終わりましたら、事務局までお知らせいただけますと幸いです。

（委員評価表記入）

（事務局、評価表確認）

午後４時03分閉会

以上